

東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（八）

― 医家・本草家の蔵書印 ―

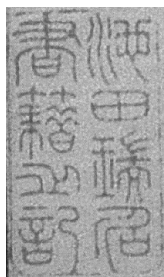
中 善 寺 慎

既刊連載目次

- ・ 朝鮮本に押捺された朝鮮の蔵書家の蔵書印（一） 書報第35号
- ・ 僧侶、寺院の蔵書印、附神官、神社の蔵書印（上）（二） 書報第36号
- ・ 僧侶、寺院の蔵書印、附神官、神社の蔵書印（下）（三） 書報第37号
- ・ 国学者の蔵書印（上）（四） 書報第38号
- ・ 国学者の蔵書印（下）（五） 書報第39号
- ・ 漢学者・漢詩人の蔵書印（六） 書報第40号
- ・ 学校・教育機関の蔵書印（七） 書報第41号

凡 例

- ・ 印影は縮尺任意の単色写真である。
 - ・ 印の大きさも色調も原本を再現できなかった。
 - ・ 代わりに印文の縦の寸法をミリメートルの数字で掲げた。
 - ・ 複数の資料に該当蔵書印を見い出せるものは、印影を採集した資料名に*印を付した。
 - ・ 資料名につづけて、請求記号を丸括弧に包んで付した。
 - ・ 蔵書家の伝記などは主として次の資料に依った。
- 市古貞次「ほか」編『国書人名辞典』
- 井上宗雄「ほか」編『日本古籍書誌学辞典』
- 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』
- 国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印』
- ・ 配列は、印記所有者のよみの五十音順とした。



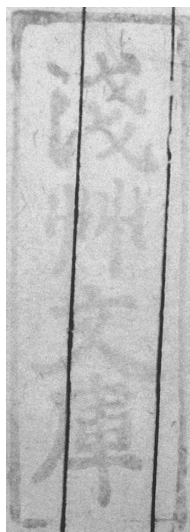
池田霧溪（一七八四—一八五七）

江戸時代後期の医者。天明四年（一七八四）上野国久方村に生まれる。初め村岡氏。名は晋。字は柔行。通称は直郷・瑞仙。号は霧溪。二十歳で江戸に出て池田錦橋（一七三五—一八一六）の門人となり痘科を修めた。常総間に住んだ。錦橋の没後、幕命でその後嗣となる。後に小普請医・医学教授・内直医となった。安政四年（一八五七）没。「池田瑞仙書籍之記」は錦橋の蔵書印と同文であるが印影を異にする。

「池田瑞仙書籍之記」（36）『隠峰野史別録』（Ⅶ「二八一—二八九」）

板坂卜齋（一五七八—一六五五）

江戸時代初期の儒医。天正六年（一五七八）生まれ。甲斐の人。幼名は長太郎。通称は如春・東赤。父宗高の号を襲名して卜齋と称す。江戸在住。医を吉田意安・同宗恂・施楽院宗伯らに学ぶ。徳川家康・秀忠・紀州侯頼宣に仕えた。寛永十四年（一六三七）には朝鮮将来の薬草を考究。晩年は浅草砂場に文庫を建て和漢の書を集めて公開したという。旧蔵書は現存するもの稀で、詳しい事績は不明。『板坂卜齋覚書』によって知られる。明暦元年（一六五五）没。墓は江戸浅草医王院（のち東昌寺境内に移る）。



『浅草文庫』（76）

『農書』（XI・三・A・c・二四）

伊東玄朴（一八〇〇—一八七二）

江戸時代後期の蘭方医。寛政十二年（一八〇〇）肥前国神埼郡仁比山村の農家執行重助の長男に生まれる。名は淵。幼名は勘助、勘造とも。字は伯寿。通称は玄朴。冲斎・長翁・伍斎などと号した。母方の縁者佐賀藩士伊東祐章の養子となる。古川左庵に漢方を学び、文化十四年（一八一七）開業。のち島本竜嘯に蘭方を学び、長崎に遊学してオランダ語を学ぶ。シーボルトに師事し江戸参府に同行し文政十一年（一八二八）本所番場町で開業。シーボルト事件に連座し入獄、玄朴と改名する。天保二年（一八三一）佐賀藩医。天保四年（一八三三）江戸御徒町に蘭学塾象先堂を開き、江戸の蘭方医の中心人物の一人となる。安政五年（一八五八）江戸神田お玉ヶ池の種痘館（のちの種痘所、西洋医学所）設立に尽力。同年、幕府奥医師に登用される。法印に叙せられ長春院の号を賜わった。明治四年（一八七一）没。墓は東京谷中の天竜院。



「伊東蔵書」（31）

『南留別志』（II-1-E-1-1092）

「象先堂図書記」（38）

『南留別志』（II-1-E-1-1092）



伊庭竹坡（?—一七九六）

江戸時代後期前半の医者。生年不詳。名は慎。字は子徳。

竹坡は号。江戸の人。大田南畝と親交があり医業では小児科を善くした。蔵書家としても知られる。掲出の二印とも別の朱印が重ねて捺され印文の判読が難しい。



「伊庭慎印」（24）

『徒然草寿命院抄』（三—A—d—三〇）

「竹坡処士」（21）

『徒然草寿命院抄』（三—A—d—三〇）

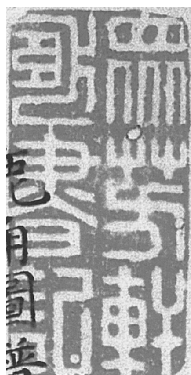
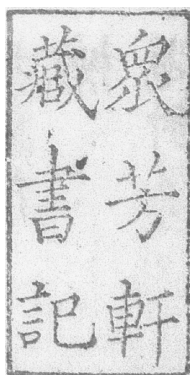
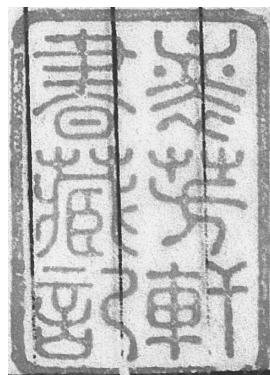


大淵常範（一八一六—一八八九）

幕末明治期の医者・本草学者。文化十三年（一八一六）生まれ。江戸の人。字は孟鴻。通称は祐玄。号は棟庵。栗本友玄の子。大淵家の嗣子となる。博物学を祖父栗本丹洲に学ぶ。幕府医官となり、元治元年（一八六四）侍医、法眼となる。骨董を愛し鑑定に長じる。明治十五年（一八八二）栗本鋤雲らと神田五軒町の和漢医学講究所に温知社薬物会を開催。明治二十一年（一八八八）両国香樹園に開催された多識会に参加している。明治二十二年（一八八九）没。

「大淵文庫」（58）

『鹿角図譜』（XV—三—B—c—二八）



小野蘭山（一七二九—一八一〇）

江戸時代後期の医者・本草家。本姓は佐伯。名は職博・希博。幼名は乙丸。字は以文。通称は喜内・道敬。号は蘭山・朽匏子・衆芳軒。地下官人小野職茂の次男。享保十四年（一七二九）京都桜木町に生まれる。松岡恕庵に本草学を学び、京都の家塾衆芳軒で多くの子弟を教授した。寛政十一年（一七九九）多紀元簡の推挙により幕府の医官となり、医学館で本草学を講じた。門人に飯沼欲斎・山本亡羊・小原桃洞・多紀元堅・岩崎灌園・木村兼葭堂ら多くの有能な学者を輩出した。主著は『本草綱目啓蒙』など。文化七年（二八一〇）没。墓は江戸浅草誓願寺の塔頭迎接院（後に移されて練馬区）。東洋文庫には蘭山の自筆本一七種がある。渡辺兼庸「小野蘭山と東洋文庫所蔵の自筆本」『東洋文庫書報』一一号、一九八〇・三。

〔衆芳軒書藏記〕（49）

『厚生新篇硝子部』（XVII—E—1014）

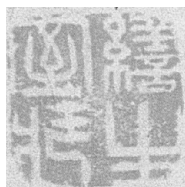
〔衆芳軒藏書記〕（57） *『広東新語』（XI—六—B—b—二八）

『校正本草綱目』（三—J—a—ろ—三二）

〔衆芳軒藏書記（陰文）〕（49）

『鹿角図譜』（XV—三—B—c—二八）

桂川家



桂川家は代々幕府医官。初代森島甫筑（一六六一—一七四七）が平戸藩医官嵐山甫安にオランダ医学を学ぶ。嵐山の流れを汲むというふくみで師命により桂川と改姓した。二代甫筑国華、三代甫三国訓、四代甫周国瑞、五代甫筑国宝、六代甫賢国寧、七代甫周国興、八代甫策国幹と続いた。桂川家累代の墓は芝白金二本榎の上行寺（のち神奈川県伊勢原市上糟屋に移転）にある。家伝の資料は早稲田大学に収蔵されている。第四代の甫周（一七五一—一八〇九）は、『解体新書』の翻訳に最年少で参画している。森島中良（一七五四—一八一〇）はその弟。掲出の二印はともに封面に押捺されており、蔵版印とみるべきもの。

「桂川之印」(25)

『桂林漫録』(Ⅱ―Ⅰ―E―Ⅰ―〇六二)

*『桂林漫録』(Ⅱ―Ⅰ―E―Ⅰ―一三七)

「繕生室蔵」(24)

『和蘭字彙』(Ⅷ―Ⅰ―〇―Ⅰ―〇一八)

河口家

河口家は代々古河藩医官。初代野田房頼が河口良庵に医学を学び、天和元年（一六八一）鳥羽藩主土井利益に召出され改姓、藩主に従い肥前国唐津に移る。二代房重は宝暦十三年（一七六三）藩主の古河移封に随い、以来代々古河に住んだ。

三代信任、四代信且、五代信順、六代信寛と続く。第五代の信順（二七九三―一八六九）は、幼名を熊之助、壮也・裕卿・陶斎と号し、文化年間に杉田玄白の天真楼塾に入門、在塾中に多くの写本を物している。河口家旧蔵の蘭方医書一三三部は、昭和四十年（一九六五）東洋文庫に寄贈された。

「河口市図書」（39）『犬解嘲』（XV二二一〇〇一）ほか

「河口市図書（陰文）」（25）

『三宅先生坐右箴』（XV二二一〇〇二）ほか

「信順之印」（17）『天真楼坐右方目録』（XV二二一〇〇七）

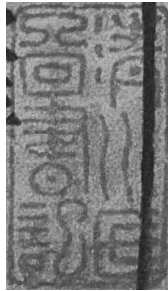


清川玄道（一八三八—一八八六）

幕末明治期の医者・漢学者。天保九年（一八三八）代々医を業とする家に生まれる。一時多峯と姓を改めるが元治元年（一八六四）清川姓に復した。名は孫。幼名は昌藏、のちに安策と改める。字は念祖。通称は玄道（五世）。菖軒と号する。江戸の人。伊沢棒軒・柏軒に師事して漢学・医学を学ぶ。文久二年（一八六二）日本橋に開業。行矣館（明治九年に開設）副院長、ついで博済病院（明治十一年に開院）の医員となった。明治十二年（一八七九）温知社の創立に参画、漢方医学研究所の副都講となる。明治十四年執匙尚薬の命を拝した。明治十六年日本橋区本町に開校した和漢医学講習所（のちに東京温知学校と改名）の学務委員・教授となり医書を講じた。東京温知病院（明治十七年開院）副院長。明治十九年（一八八六）没。墓は東京本所番場町の妙源寺（のち葛飾区堀切に移転）。

「清川氏図書記」（38）

『重広補註黄帝内経素問』（Ⅲ・六・A・一八〇二）



小島尚質（一七九七—一八四八）

江戸時代後期の医者。字は学古。名は尚質・和威。通称は喜之助・喜庵・春庵（四世）。宝素・葆素と号した。寛政九年（一七九七）江戸下谷の生まれ。幕府御番医師小島根一（春庵）の三男。母は前野良沢（蘭化）の女である。二兄が早世したので享和三年（一八〇三）家督を継ぐ。妻は塙忠宝の長女。文化十四年（一八一七）医学館薬調合役取締。天保七年（一八三六）法眼。嘉永元年（一八四八）医学館寄宿寮頭取。狩谷掖斎らと深交。自らの著書は少ないが、善本医籍の収書に努め、考証学者として書誌校勘学に通じた。嘉永元年（一八四八）没。墓は江戸三田の貞林寺。嗣子尚真（春沂。一八二九—一八五七）との二代にわたる蔵書の多くは、のちに楊守敬の蔵に帰した。

「学古氏」（21）

『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』（二C—d—三）

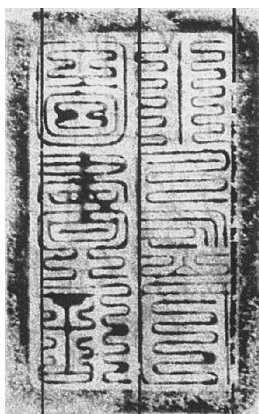
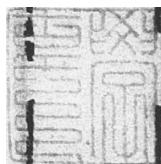
「小島氏図書記」（54）

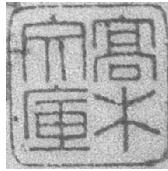
『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』（二C—d—三）

*『大唐六典』（XI—A—b—二五）

「尚質私印」（21）

『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』（二C—d—三）





高木春山（?—一八五二）

江戸後期の本草家。名は以孝。通称は八兵衛。号は春山。生年不詳。江戸下目黒郷長峰町に住む。初め諸侯の用達を家業とした。諸芸に通じ俳句を嗜む。国事に心を砕き、国産振興には本草書が大事と曾槩（占春）に入門。土佐派の小田切真助について画技を学ぶ。本業を擲ち家産を傾けて動植物の彩色図譜製作に打ち込むが、業なかばにして嘉永五年（一八五二）没。未定稿と補遺一九五冊からなる『本草図説』を遺す。嗣子なく家事紛擾のため遺稿類は散逸した。

「高本文庫」（22）『清石問答』（X—五—L—e—一〇—一八）

*『万葉集』（三—F—a—へ—一—二八）

多紀元堅（一七九五—一八五七）

江戸時代後期の医者。寛政七年（一七九五）多紀元簡（桂山。一七五五—一八一〇）の五男に生まれる。本姓は丹波。幼名は綱之進、長じて安叔。字は菫庭・亦柔。書斎号は存誠藥室。号は樂真院、のち將軍徳川家慶の諡号を避け樂春院と改める。元胤の弟。日本橋矢の倉に別家を興す。別号の三松居は、その邸が若松町・久松町・村松町に隣接していたことに由来する。医学館講師、奥詁医師を命ぜられた。また狩谷掖斎らと深く交わり、古書の校勘に努める。著書に『傷寒論述義』『藥治通義』ほか多数がある。天保十一年（一八四〇）法印。天保十四年（一八四三）所蔵の医書百部を医学館に献上した。安政四年（一八五七）没。墓は武蔵豊島郡上中里の城官寺にある。父兄と同じく蔵書印が落款と共用である。『奚暇斎読本記』印の使用例は少ないという。多紀家や医学館の蔵書は内閣文庫に収められている。



「奚暇斎読本記」（32）『増補六臣註文選』（三—A—二八）



中山蘭渚（一六九七—一七七九）

江戸時代中期の医者。元禄十年（一六九七）佐渡の医師宗仙中山治郎右衛門の次男に生まれる。本姓は平。名は、初め治貞、のち永貞。幼名は久米助。字は季通。通称は玄亭。蘭渚・随心院と号した。享保二年（一七一七）京都に出て小川朔庵・松岡恕庵らに医术を学ぶ。佐渡で子弟に教授ののち、享保九年（一七二四）京都で開業。延享三年（一七四六）法眼。官医となり安永五年（一七七六）致仕するまで公卿・大名の治療にあたった。詩文・和歌も能くし佐渡への茶湯の普及にも貢献した。安永八年（一七七九）没。京都福勝寺に葬る。著書に『傷寒論釈註』がある。

「蘭渚室図書記」（22）

『徒然草』（三B a—一九）



奈須恒徳（一七七四—一八四一）

江戸時代後期の儒医。江戸人。本姓田沢。名は恒徳。字は士常。通称は宗三・玄竹。諱は玄盅。柳村・久昌院と号す。安永三年（一七七四）幕府医官田沢保久の次男に生まれる。初め多紀元徳（藍溪）に学ぶが、のち曲直瀬道三の門に転じた。幕府医官の奈須恒隆の養子となり、寛政八年（一七九六）相続。医官としての出世を断念し専ら古医方に通じ書誌学的研究に尽力した。弟子に服部甫庵がいる。著書『本朝医談』など。天保十二年（一八四一）没。墓は江戸谷中感應寺の墓地にある。

『久昌院蔵書』（32）

『聚分韻略』（二一C一c一四）

服部甫庵（一八〇四—一八九二）

幕末・明治時代初期の医者。下野安蘇郡天明郷の人。名は政世。幼名は豊太郎。号は甫庵・煉霞翁・乗付陳人。文化元年（一八〇四）代々医業の家に生まれる。文化十四年（一八一七）幕府医官の奈須恒徳に師事する。家蔵の古医書を整理・考証を行なう。読書を好み書画を愛玩する。蔵書は一万巻を越えたという。晩年浅田宗伯と親交を持ち、漢方医学の復興に努めた。著書に『三喜備考』がある。明治二十五年（一八九二）没。墓は栃木県佐野市宝竜寺。



「服部政世」（16）『新刊名方類証医書大全』（二一C—e—三）

「甫庵蔵書」（29）『長恨歌伝…』（二一C—四九）

『御成敗式目聞書』（二一C—五〇）

『御成敗式目』（二一C—五一）

*『八卷書』（二一C—五二）

『新刊名方類証医書大全』（二一C—e—三）

久永章武

幕末明治期の本草家。三河国安城村の最後の領主。久永章正の子。通称は岩吉郎。慶応四年（一八六八）家督を相続。翌明治二年（一八六九）上知。江戸の本草学者と交友があり、のち尾張の伊東圭介を師とした。

「久永氏之藏書」(24) 『啓蒙禽譜』(三十一「a」ろ一六八)



松岡恕庵（一六六八—一七四六）

江戸時代中期の医者、本草学者。名は玄達。字は成章。通称は恕庵。号は怡顔斎・苟完居、また埴鈴翁。寛文八年（一六六八）京都に生まれる。初め山崎闇斎に入門、のち伊藤仁斎、東涯父子に師事して儒学を修めた。また稻生若水に本草学を学んだ。町医を業とするかたわら小野蘭山など多くの門下生を育成。享保六年（一七二一）幕命により江戸に出て薬品の鑑定に従事した。書庫を二棟建て、一つには漢籍を一つには国書を蔵したという。著書は『用藥須知前編』『食療正要』など。延享三年（一七四六）没。墓は京都妙心寺実相院（のち同寺塔頭光国院に改葬）。

「怡顔斎（陰文）」（31） *『怡顔斎博蒐編』（Ⅱ一〇〇五）

『韓柳全集』（Ⅳ一八〇二）

「怡顔斎（小）」（45）

『韓柳全集』（Ⅳ一八〇二）

「怡顔斎（大）」（59）

『韓柳全集』（Ⅳ一八〇二）

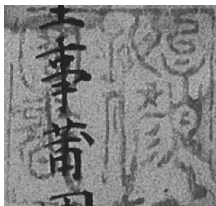
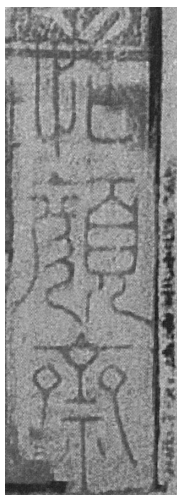
「怡顔斎図書」（27）

『怡顔斎博蒐編』（Ⅱ一〇〇五）

「松岡氏図書」（26）

*『怡顔斎博蒐編』（Ⅱ一〇〇五）

『韓柳全集』（Ⅳ一八〇二）



曲直瀬正琳（一五六五—一六一一）

安土桃山・江戸時代前期の医者。本姓は一柳。幼名は又五郎。字は養庵。通称は正琳。玉翁と号した。永禄八年（一五六五）一柳恕心の男に生まれ曲直瀬玄朔の養子となる。曲直瀬道三（正盛）について学ぶ。初め豊臣秀次に仕え、のち秀吉・家康・秀忠に仕える。文禄元年（一五九二）法印。文禄四年（一五九五）宇喜多秀家の夫人の奇病を治癒した謝礼として朝鮮の役に得た書物数百卷を与えられた。慶長五年（一六〇〇）後陽成天皇の不予の折に薬を献じ平癒を得た功で「養安院」号を賜った。慶長十六年（一六一一）没。墓は京都紫野大徳寺の玉林院にある。銅印であるという「養安院藏書」印は、正琳個人の藏書印ではなく、曲直瀬家歴代の襲用したものらしい。

「養安」（27）

『埤雅』（XI—三—A—a—三）

*『芸文類聚』（XI—四—B—一九）

「養安院藏書」（64）

『彙刻書目』（II—一七—C—三三）



山田業広（一八〇八—一八八二）

幕末明治期の儒医。字は子静。通称は昌栄。号は椿庭・恵迪。斎号は九折堂。文化五年（一八〇八）高崎藩医山田由之の長男に生まれる。はじめ儒学を朝川善庵に受け、ついで医学を伊沢蘭軒に学び蘭門の五哲と称せられた。蘭軒没後は多紀元堅に師事し、さらに痘科を池田京水に学ぶ。安政四年（一八五七）江戸医学館講師。明治維新後は高崎藩の医学校督学、東京神田の済衆病院（明治十一年開院）院長などを歴任した。明治十二年（一八七九）漢方存続運動の団体の温知社を組織し、その初代社首。臨床家としての手腕は高く評価され、考証医学者としての著書も多い。また漢詩をよくした。明治十四年（一八八二）没。墓は東京駒込の蓮光寺。

「杉垣簪珍藏記」（34）

『異端弁正』（XI・四・B・四）

『魁本大字諸儒箋解古文真宝前集』（二・B・d・二）

*『聚分韻略』（二・C・c・四）



吉田宗恂（一五五八—一六一〇）

江戸時代前期の医者。京都の人。永禄元年（一五五八）吉田宗桂（初代意庵）の次男に生まれる。角倉了以の弟。名は光政・宗恂。通称は孫次郎。意庵（二代）、のち勅により意安と改める。号は又玄子。民部卿法印。漢学を藤原惺窩に学ぶ。父の医業を継ぎ、豊臣秀次ついで徳川家康に仕え、隔年江戸に出仕して、家康の本草研究の顧問格となった。博物学に精通する。著書は『素問講義』など。慶長十五年（一六一〇）没。墓は京都市右京区嵯峨二尊院の後山墓地にある。称意館は吉田家の別称。「吉氏家蔵」印は吉田家累代が使用したもののようである。



「吉氏家蔵」(34) *『陸奥話後三年記』(X-五-G-六五)

『埤雅』(XI-三-A-a-三)

「称意館蔵書記」(43)

*『陸奥話後三年記』(X-五-G-六五)

『埤雅』(XI-三-A-a-三)

(国立国会図書館司書)